巻 頭 言

この年報は、2017年の人文学研究科の創設（旧文学研究科、旧国際言語文化研究科、国際開発研究科第 3 専攻の再編統合）から 5 年目にあたる2021年度における研究科の教育研究活動の概略について報告するものである。しかし、発行主体である教育研究推進室が旧文学研究科に設置されたのは2006年のことであり、以来、上記の組織再編に至るまで、この年報は、ギリシア語で大学院教育を意味する『メタプティヒアカ』というタイトルで刊行され、その内容も大学院教育の改革や国際化に向けた講演会やワークショップの報告が中心となっていた。たとえば､創刊号（2006年）ではスタンフォード大学古典学科における大学院教育のシステムが紹介され、第 3 号（2008年）には「英語で教える秘訣」､「アメリカの大学における FD の最前線」などの興味深い記事が掲載されている。それが、どのような経緯によって無味乾燥なただの『年報』と化したのかは詳らかにしないが､2022年度からは､研究科の組織が従来のコースに代えて学繋単位で構成されるようになり、また部局執行部の顔ぶれが一新されたことに伴い、教育研究推進室の研究科における位置づけとその活動のあり方、それを受けての『年報』の内容についても、初心に立ち戻るべく改革に着手しているところである。なかでも特筆すべきは、教育研究推進室を研究科長直属のシンクタンクとして位置づけ直したことであり、そのために従来の室長（副研究科長）に代えて、推進室の活動を主体的にとりまとめる幹事を室員の一人にお任せすることにした。2022年度は、言語文化学繋の宇都木昭教授がこの任にあたり、出身旧部局を異にする教員相互のコミュニケーションを深めるために「自己紹介の会」を毎月オンラインで開催するなど、研究科の一体感を醸成するためにご尽力をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

また、部局としては、この間大学執行部からストップがかけられていた承継教員の新規採用人事が再開された結果、2023年 4 月からはその第一陣として哲学分野・専門と美学美術史学分野・専門に、それぞれ国外の有力大学で学位を取得し国際的に活躍する卓越した若手研究者をお迎えする予定である。これにとどまらず、今後も引き続き学際的な展望のもと各研究分野の最先端で活躍する優れた若手を戦略的に採用していくことで、組織の研究力のさらなる強化と活性化をはかりたいと考えている。その際、この教育研究推進室がそのような若手研究者たちのエネルギーを集約し、人文学研究科のいっそうの発展の基盤となることを祈念して、巻頭のご挨拶とさせていただく次第である。

2023年 2 月17日

名古屋大学大学院人文学研究科長
周藤芳幸